

あとちひ心中 卯月の潤色

上巻 末期の道行

江戸ヲ今捨つる。身にも恐ろし犬の聲。辻を隔てて見返ればあれで生れし町所家の。

馴染も、フシ十五年。其の春夏の此の月は。

祝ひ月とて物忌ひ。長揃しの字をさへも嫌

ひしが死して死骸を知る人に其の死恥もつ

つましく。スエテ其方の髻亂れずや。いや吾

よりもおの様の。鬢撫で付けてかき撫でて。

死んだ跡迄好い殿と。人に言はせま、フシほ

しあかり。今宵の月を。月月に。待ちしも

遂に引きかへてオトリ冥途の。使我々を待つ

らんものとかきくれて。涙曇りの十七夜フシ

二人が袖に宿しけり。よしや地獄へ墮つる

とも。スエテたとへ佛になるとても引。タタキ

必ず契りこめや町。木夫本町筋の軒深く。

ワキ思ひしみたる。二人仲なれば埋まば同じ

安土町。ワキ生れ代りて又いつか。木夫婆

婆の便の備後町。ワキ思へば我も元服し。

木夫私も若いに鐵漿つけて遁れし賽の。河原

町。木夫三途の瀬戸の淡路町。ワキ越ゆれ

ば親の古里の。木夫名にも別る、平野町。

二人、暗近き時太鼓どう道修町、フシこれやこ

の。修羅の大鼓の。響かと共に驚く袖と袖。

フシ抱き寄せつ、泣くばかり。木夫聞けば私

も母様の三十過ぎての初子とや。二人其の讓

かや馴れそめて、フシ一夜、離れた。事もな

く。交す枕に子胤の無いか、オトリこれも。

タタキ生ますの數ならば。根を掘る竹の伏見

町。木夫高麗橋の西東。ワキ床も定めぬ。

二人立君はこれも世渡る習ひとて。木夫浮世

小路の細き聲。木夫謠うて歸る其の歌の。

二人品ある中にも來ぬ人を待つほの。浦の夕

なぎに。木夫焼くや藻鹽の身をこがす。ワキ

それは東の。二人物語、地耳に聞きたるばか

りぞや。そもじと我は難波津の。貴賤群集

のみるめかる尼が崎町過書町に。はや北濱

の中の島オクリ明口は。歌、天満の橋々賣りて。

梅田のく堤を染めし。紅葉傘屋のな女夫

の心中。男廿一おかめは十五。年に合はず

りや。いたづらく、ぢやサア繪草紙る。地

よその口のは。フシア餘所事に。買ひ求めて

は慰みし此の身の果を讀實に。長地誰が節

付けて田舎迄唄ひ流さん、蜷川水も濁りて此

の世へは。いつ歸りすむ根なし草、左手は。

無常の燒草と。惜しからぬ身は惜しからず。

木夫灰となさうか此の肌。ワキ煙となるか

此の形。木夫惜しや。ワキいとしや。二人

悲しやと。引合ひし手をなほしめて、フシ涙

の。限り泣き盡くす。森の小鳥。川千鳥合

法鳥も聲さびて。はや東明も近付けば。小

田守る賤に忍ばんと。右へ下れば網舟の目

にやか、らん行先は。はや會根崎の宮仕の

朝清めする折なれば。今はせん方夏草の。
人目堤の下蔭をステチこゝぞ。夫婦が最期場
と。フシ泣く。休らひ立ちにけり。

地お龜は夫の顔を見て連立つ冥途の道とは
知れど。いま今生の別として言ひ度い事の何
やらが。胸にはあつて口へ出ず。飽く程顔
が見て死にたや心なの短夜とフシ身を投げ。
かけて泣き居たり。ア、愚かや愚痴やあさ
ましや。永き來世があるぞかしさりながら。
心にかゝるは其方の父御。二人ともなき一
人子を憎や掣めが殺せしと。まこそ恨み憎
しみの。これ罪障となるぞとてフシ共に平
伏しな。きければ。いや父様は男氣の思ひ
諦めあるべきが。いとしや在所のお袋様。姑
なりとて一日の。給仕へした事もなく。大
事の子をば嫁ゆゑに。失うた殺したとお叱
りなされんこれ一つ。目の不自由な伯母様
の力となるはこち女夫。さぞ今頃は泣き悲
しみ目でも眩はぬかどうしたと。胸に塞が
るこれ二つ。又母様の十三年觀音經を書き

ませう。佛になつて下さんせと墓に向うて
約束の。これが違つた何やかや斯く迄重き
罪科の。閻魔の前には鐵の帳に付くと聞く
ものを。善い所へよも行かじ火水の地獄も
厭はねども。夫婦別れて行かうかと。これ
のみ猶も迷ひぞとステチ聲も惜まず歎きける。
さすが男は力をつけ。一つに行かうと別
れうと皆一心の向けやうぞ。氷の地獄火災
の地獄劍の山へ登るとも。取り交したる手
は放さじと。心強くは言ひけれどまだ奮む
花出づる月。玉のやうなる若い者若い女の
顔はなさ。宥めらるゝも宥むるもフシ分け
て分たぬ涙なり。地あればや東も白うだり
サア念佛と言ひければ。心得たりと懐中よ
り剃刀二挺取出し。是も母様の額たれとて
譲なり。私は是で死にたいと泣く。出す
其の中に。向ふの野道を入通ふあれよく
と心は急く。二挺の剃刀一つに取り南無阿
彌陀佛と引寄すれば。お龜は常々信仰の南
無觀世音菩薩様。かゝ様の戒名教養授倫信

女。一つ蓮に導き給へ南無觀音様觀音様と。
手を合せて待ちけれども男は目くれ差俯向
きステチ只泣くより外の事ぞなき。地エ、憂
き目を見せて何事と。夫の手を取り我が咽
喉に押當つれば思ひ切り。南無阿彌陀佛と
笛のくさり。剃刀の刃も折れよと一拂りは
扱ひしが。若き者の悲しさは止めの急所を
知らずして。まだ息絶えず悶ゆるを。劍の
口を隠さんと抱への帯をくるくると。二三
遍引廻す。フシ憂き目の程ぞ不便なる。我も
やがて追つ付かんと咽喉に當つる剃刀の。
刃は鋸と折れ砕け皮肉ばかり切れけるを。
力を入れて突きけれどもフシ徹りつべうは
なかりけり。南無三寶と剃刀捨て側に拔置
く脇指の。鞘をもつて引上ぐる鐔は重し手
は弱る。はづんではぬる。勢に脇差抜けて
樋の口の。井出の水草の漲つてざんぶとこ
そは沈んだれ。エ、しなしたりこは如何に
と這ひ下る堤の露。こほれし血に足入りッ
池へどうど落ちたりけり。池は深くて

泥深し底の脇指尋ね兼ね。浮きぬ沈みぬ漂

ひしが今を最期の眼にも。夫を思ふお龜が

心引上けんと思ひけん。這ふく岸に寄

ると見えしが眩む眼に氣も亂れ。同じく池

へどうど落ち互に助け引上けん。抱き上

ぐればどうど伏し。かき上ぐればかつばと

伏し心ばかりを力にて。なう與兵衛様く

お龜くと呼びかはず。たえく切る息

の下。此の世からなる地獄かやはれ果敢

なき三重有様なり。地朝出の土民が見付け

出し。ヤレ心中と呼ばはる聲に里人下り合

ひ池に飛び入り引上ぐれば。女は死して眞

薦草菰や庭に死骸を埋む。男は淺疵半死。

殺してくれ死なしてくれと。泣き叫ぶ間に

縁者一門かけ付けく。北久太郎町心齋橋

古道具屋の跡取。掣養子ととりくに見物

人の山をなす。かくてはすまずと與兵衛を

駕籠に打乗せ存らへし。かひもあるかや蜆

川跡しら。なみとぞ三重成りにける。

中之巻

廣がりし。フシ浮名は何と。地すほめて

も傘屋夫婦の心中と。唄にうたはれ繪に賣

られ。或は狂言淨瑠璃のフシ三十五日には

やなりぬ。地父長兵衛は一人子を敢なく

せし其の悔み。掣與兵衛が疵も亦伊達堀の

伯母諸共に。傳三兄弟引連れて河内の親の

手に預け。天王寺の東門をフシ大阪の方へ

歸りしが。地下女のふりは神子町を見やり

てわつと泣出し。開申し伯母御様お今女郎。

今迄は物見見物物参り。又は此のよな時節

でもお龜様も打揃ひ。地びらり帽子に加賀

菅笠大振袖の後帯。田舎者でも見返りてお

供に附いた私等まで。ほんに肩がいかつた

に大事の花を失うて物足らずな子供には歩

けど足を引戻す。いつやら此處の神子町へ

それがお供の仕納か。冥途の道の一人旅離

がお供しませうぞ。おふりどうちやかうち

やと愛想らしい聲つきが。耳に残つてある

やうな元結一筋紙一枚買はずに貰うて使う

たものお龜様に別れてから。五分で買うた

塵紙を。涙に拭ひあけたとてフシ口説き。

立ててぞ歎きける。地伯母も涙の乾かぬに

又言ひ出して泣かしやるか。誠にいつぞや

口寄に此の神子町へ来たと聞く。それもか

うなる約束ぢや。最期の時は親伯母に言ひ

残し度い事もさぞ。問うて取らせんいざさ

らばと。冥途の闇の黒格子オクラ辻がもと

へぞ立寄りける。フシ神子の内には。地心得

て茶を持つて出る煙草盆。文庫の蓋に梓弓

奥より神子も立出でて。御祈禱か口寄か

お志の精霊は。地目上か目下か古い佛か

新佛か。神降致してはお十二銅が一包。御

潔穢が百一十フシお望み次第と言ひければ。

ア、く禮錢はどうなりとも。三十五日の

新精霊。荒血の上で死したる人。よう寄ら

つしやれ寄り給へと。各數珠に手をかけて。

ステテ。聽聞するこそ哀れなれ。神子中書千早振

御潔穢の道浄め。天清浄とは水火の浄め。

地清浄とは屋内の浄め。内外六根清浄とは

世になき魂の道しるべ。六道四生のフシ淨

めぞかし。忝くはましませど神と佛は夜と晝。娑婆と冥土は日光月光出づるも入るも同じ道。娑婆往來八千度釋迦の子神子が梓弓。此の弦音に寄り來たは、梅田に。屍さらしなや。伯母様の手向有難や。神子なつかしの父御前。合の枕の與兵衛様忘れがたなき古へは。生口寄せた吾なれど。今死口に寄人が語り度いぞや問はれたやなう。ワキ調梅田に屍さらしなとは我がめい月の面影よなう。地姪一人伯母一人何とて我に知らせもせず。不慮の死を召さつたる。目の見えぬ我なれば、フシ捨捨山の恨めしや。太夫岡山の枯木の一本立母なき身には伯母様を。天とも地とも頼めども地ふぢの木柱茅屋の雨。人こそ知らね屋の内に。直で立つたる人はなし。先へござつた母様の第三年も経たぬ間に。出船は遠く入船の親しなるは世の憤ひ。烏帽子寶の親仁様内の今めに廻されて。こちと女夫は雨夜の星どこにあるやら無いやらで。死なねばならぬ内

の様語れば親の懺悔なり。下された緋縮緬形見になれとのほし縫か。我が名は苦の下紐も與兵衛様はおいとほしや。六尺だけに存らへて二度の死をなされうか。再び憂き死地なされうかと、フシこれが。迷ひとなるわいなう。ワキ調テ、伯母が歎きもそれ一つ。心中の作法にて。死損ひし片々は試物になると聞く。地與兵衛が疵を養生し本腹したる其の後に。試物になるならば伯母は何とならうぞや。其方も伯母が可愛くば片時も早う一途に。地取殺してはなせたもらぬぞ。地いやなう世間の心中とそれは違ひがあらかねの。金銀づくの勤の身奉公人や主ある人。娘子などの添はれぬ仲。うろたへ死なぬ心中は人殺と同然の。罪に沈むもフシ世の作法。幼馴染のこち女夫比翼連理の仲はよし。何に不足はなけれども内では誰が點を打つ大鎌の犬めらに。懲り果てて死ぬる身を言は、面々自害とも。心中の外的心中ぞや。町衆在所世間へも此の歎きを言

ひわけて。與兵衛様の命を助け道心出家させまして。朝晩回向が受けたやな。そこに蹲ぶ兄弟の犬どもを。追出して下さらば。千僧萬僧百萬僧のとひ弔ひにも増鏡。黄泉の疊が晴したやなうワキ調いやこれなうお龜様。女夫の衆が此の今を酔で裂いて飲むやうに。言ひたいがいと言ひこめて死んでもまだ言ひ足らぬか。榮耀が餘つてこなた衆が。ほたえ死ぬるを俺兄弟が知つたか。それに何ちや兄弟の犬めらとはテ、妾や犬ぢや黒犬ぢや。地試物になる與兵衛の身體をがり、と囁んでやる。梅田堤で其方の死骸。嘔まいで残り多いわいなう太夫地なう死人に妄語は無きぞとよ。恩を知らぬは犬畜生身の皮剥いでも母様の。御恩を思は、幡天蓋。袈裟の一重も上げはせず着衣裳迄もがり取り。家一杯に荒れ鼠父御をたらず見苦しや。それらに弟の傳三めが旦那まざりにとぼし立て。提燈に釣鐘と主ある我等が袖袂引き。與兵衛殿を失ひ

て夫婦になつて家の跡。地繼がうというた
を忘れたか。こちと夫婦は下人にて今兄弟
は旦那顔。車は海へ船は山みな逆さまの憂
さ辛さ。語れば親の恥曝し。言へば言葉の
くすいをの。夜の衣の我が夫の。上地命を助
け出家となし。家を暗ます黒雲を。フシ拂は
ば。晴るゝ胸の月ヲキ地守りの神と木綿づけ
鳥の別れば又の逢瀬あり。夫夫今は返らぬ
三途の河ヲキ影はとまらず。木夫手に取られ
ず。二人兵士の使繁ければ愛き世の名残是
迄と。梓の弓の未弭に。フシ弦走りして失
せにけり。地伯母は涙に沈みながら神子の
前とも思はれず。調コレ長兵衛の邪見者亡
者の寄口聞きやつたか。我は其方の姉ぢや
ぞや。身こそ貧なれ一文一錢合力は受けま
いし。なに輕薄が言ひたかろ。地現在弟に
殿様つけ。内外の者に追従するも母の無
い姪子ども。可愛がらせう爲はつきり。月
に一度強ひて二度。三度とは。フシ行かねど
も。地内のさだつも見て取つた此の摺り面

兄弟が。お龜女夫を踏付けに虐め廻すと
いふ事を。盲でさへ知つて居る其方に二つ
目は無いか。但し知つての指圖かお龜は其
方が死なした。お龜を返しや姪返しや。如
何に妾が可愛いとて我が子に思ひかへると
は。憐いぞやとせきあげせきあけく。地泣
き叫び側なる竹杖おつ取りて姪の敵と長兵
衛を。散々にこそ撲つたりけれ。傳三も
今も縋り付きこれ申し伯母御様。人中と
いひ女中の身如何に弟御なればとて。地近
頃非道千萬ともぎ放す手を振りほどきヤア
非道とは誰が事その非道といふは己れ等兄
弟同じ女子と生れても。己れ等とは違つた
ぞ善悪は噛み分ける。エ、據此の伯母が手
前ともかうもするならば。お龜夫婦を引取
つて分立つて商させ。公事みやしても己
れ等にながやく口を聞かせうか。貧の病に
肩身もすほり可愛や氣弱な甥姪を。踏み付
けにさせたよなあせて片目見ゆるなら。
立居素振に氣をつけても。かうやみくと

は死なせまじ其の胸忿な心からは。二人が
死に出る體を見ても見ぬ顔しかねまい。恨
めしの者どもやと。盲打に殴り打ちくッ
シ聲も。惜ます泣きけるが。地不便やお龜が
存生に。己れ等が驕る面たきたからう撲
ちたかろ。若い身なれば齒きしみて。
泳へた心ヲシ。思ひやる。地是はお龜が打つ
杖と。折るゝばかりに四つ五つ又丁々と打
ちつけて。今は打つても叩いても死んだお
龜が歸るにこそ。よしなき罪を造りしと杖
をからりと投捨てて。ステテ前後不覺に。伏
し沈み聲を。ばかりに歎きしは。理。せめ
てあはれなり。至極につまり一言も傳三兄
弟顔をさけ。伏目になれば長兵衛もやう
く涙を押し止め。調道理とも尤とも皆某が
誤なり。此の上は身に代へて與兵衛が命
を助け。出家させ娘が願を立て申す。地落
居の後は今兄弟家を追出し申すべし。外聞
といひ親の身でのめく生きて居る心。伯
母御推量遊ばせとステテ又さめざめと泣きけ

れば。ヲ、それはせめても其の言葉。達はぬやうに、フシ頼むぞや。同ハア神子殿へも面目なや。いつぞや此處へ生口寄せに參つたけな。地美しい娘こそ今大阪の口の端に。かゝる様も縁ならめ拜んで下され頼みますと。出づれば神子も門送り。いとほさまやと諸共に思ひの数も百二十。袖に涙を包み錢繫がる。因果や三三〇めぐり行く。

フシ月にも日にも。地秋風と捨果てたりし奥兵衛が。生きがひもなき身なれども親伯母の心黙止れず。髪制りこほし發心とけ妻の菩提も我が後世も。助け給へといふ文字その名を助給法師と改め。再び難波の古里へは踏み返さじと足曳の。大和の國平群谷大念佛派の庵室に、フシ知邊を求め閉籠り。妻の位牌の手向草。地幽々たる谷に下りては去此不遠の水を荷ひ。盤々たる山路に薪を拾ひては。十萬億土の月を攀ぢオトリ霜に。あこがれ霞に臥し櫻が。とさす柴

の戸も。地臨に明けて今年も早や。フシ卯月半になりにけり。地相住の道心は二三日以前より。石山參りの留守なれば助給一人佛前に。心も細き鐘の聲廬山の雨の世捨人。捨てても捨てぬ面影は夢ともなく現とも。なき人こゝにありくと昔を見るも。次第歸るさ知らぬ死出の旅。く。露の仇籠ン急がん。地戀といふ其の投網にからまれ

て。浮かみもやらぬお龜とは。フシ餘所には人も水暗き。澤邊の螢。稻の殿。影かあらぬか簾のひまにオトリもるは卯の花白妙のフシ雪のな振袖ちらくとりありし。昔に奈良團扇。風軽々とフシ駕籠昇が。地昨日の且那今朝の幻。夢の浮橋一つ橋跨けちや。合點ちや跨けちや合點ちや手にも。取られぬ籠駕籠。姿の山に肩かゆる。フシ賤が袂もぬなる。地折節助給は念佛に氣を屈し茫然と睡氣さし。物に化されたる如く。うつかりとして表を見れば。山家に見馴れぬ女中駕籠不思議と思ふ氣も付かず。身をも

處も打忘れフシとほんど。してぞ居たりける。地細谷川の石原息杖の音喧く。川瀬が鳴るか空耳か女の聲にて高々と。同北久太郎町古道具屋。傘屋與兵衛様と申すお方は此の邊ではござらぬかと。地尋ぬる聲と諸共に。フシ駕籠は庵に近づきたり。地助給は元より魂魄に氣を奪はれたる夢心地。同ヲ、これこれ其の與兵衛はこゝぢやくと。地扇を揚げて打招くヤレく嬉しやあそこぢやけな。駕籠の衆頼みますまちつと急いで下さんせと。機嫌よけなる高笑ひ。程なく駕籠は庵室のフシ柴の戸口に昇き据ゆる。地簾をあぐれば妻のお龜にこやかな

る翠の眉。芙蓉の目許わさくとさつても暑い事かな。それこそな櫛の葉の水一つ。下さんせと。汗押拭ふと見えにけり。同いやく水は入らぬもの釜の下を焚き付けう。して先づ今日は駕籠に乗つて。何處へ行きやつた事ぞといへばさればいな。今日は四月十七日觀音様の御縁日。こな様と父

様と仲の良うなる願だてに。二十二社廻り
しましてその序に神子町の。黒格子お辻の
方へ在所の衆が呼ばしやんして。ちよつと
逢ひに寄りました。地去年こな様の生口を
寄せてから近付きになりそめて。再々私を
呼び出して父様にも伯母様にも。折々は逢
ひまする神子殿さへ合點なれば。何時逢は
うと任なるにせよこな様も折々は。呼出し
ては下さんせぬと。そよりに咽ぶ恨みの涙。
世になき人と氣も付かぬ。フシ夫の心ぞ哀
れなる。地ム、先づ駕籠は預らうこゝへ通
りやと呼びければ。嬉しや誰もなささうな
と裾をかいとる身も軽く。下りるの簾捲き
返す。フシ駕籠は。亂れて失せにけり。地助
給内に案内し。地これ見や今は此の身持。
結構な事は無けれども。地浮世の世話を餘
所に見て藪の義紙衣。先づ盗人の虞れな
く寢覺がよいと言ひければ。お龜は庵の體
を見てア、本に扱も氣樂な住居ぢや。釜一
つ鍋一つ谷から水を汲んで來て。山から柴

を折つて來て米ごしくと洗うて。粗板に
白瓜菜刀取つて。てきくくくやててきく
くくや。てきくくしやんと揉瓜に。なれ
く。茄子秋茄子嫁を説く姑はなし。相伴は
如來様火吹竹は一本。火箸は二本國中に怖
いと思ふ今めは居ず。こな様と只二人寢た
けりや宵から長枕。寢ともなくば起き通し
誰が叱らうとも思はよこそ。世界の樂と
は此の住家女夫一所に居る内に。せめて一
日片時でもかうした暮はしもせいで。今は
が何になるなんほ此の住居でも。女房が無
うてはちつと事がかけませう。地鍋蓋と女
房は無うて叶はぬ筈なれど。鍋蓋あつても
女房が無い事のかげぬは不思議ぢやまで。
ほんに忘れた其の筈ぢや。地道具と女房は
あり合せ。尤ちやく。道具屋の娘ぢやもの
と。とんと背けて身をすねて。フシ口説し
かくる目許なり。地色氣を離れた道心もど
うやら心浮いて來て。地ヤアいかう口が上
つたの。かうして居ても面白い事芥子程も

持ちませぬ。胡散な事があるならば拷問な
されと言ひければ。それその口が憎いわい
の。此方覺えが御座らぬか。伊達堀の伯母
様の聞けばあの與兵衛は。うちの茶が飲み
足らぬか茶屋へもちよこく。遣ふとある。
その言葉を覺えてか。それから尋ぬる折も
なく今で胸に溜つてゐて。地穿鑿せうばつ
かりに今日ははるく。來ました茶屋で此方
の參る茶は新造の振か詰茶か。但しは白の
白茶か。風呂で焚いた煎じ茶が私がやうな
薄茶は。交した言葉もさめ切つて水くさう
て飲まれまい。互にこの茶の初昔私は忘れ
はしませぬと。衣の袖にひつたりと。フシ抱
き付いてぞ泣きにける。地助給打笑ひエ、
功にも立たぬ情氣ぢやなう。地今は左様の
色茶もなく只お茶湯で暮します。地さらば
釜を焚付けてお茶湯一服供へませうと。火
打箱引寄せて。はたくと打ちければお龜
すつくと立上り。なう暑や堪へ難や愛着戀
慕の迷の縁に引かれて石の火の身を焦

すあさましや。これまでなりと駆け出づる。地我を捨てて何處へぞ。暫しくと縄れども影も形もなき人の。ありとは見えて園原や伏屋に立てる我が妻の。フシ位牌に。隠れ消えにけり。地ヤレお龜女ども。おかめくと尋ねれども木魂ばかりに姿もなし。ま一度顔を見せよかし。つれなの人やとかつばと伏し。フシ消え入りくと歎きしが。やうくと正氣つき。調ア、狼狽たり南無三寶。思へばお龜は死したるもの。扱は魂魄止まつてまざく言葉を交せしか。地不便の者の心やと。スエテまた咽び入るばかりなり。地エ、口惜しやあさましや去年一所に死ぬるならば。迷ふとも共に迷ひ浮むとも共に浮むべし。つれなくも死後れ中有の闇に迷はせし。調今出家とはなりたれども知識知者の身でもなし。文盲不學の青道心念佛回向なしたるとて。亡者の功德によもならじ。地今日は卯月十七日此の命日のあけぬ間に。今宵の中に自害して來月の周忌

は。未來で一所に付き添はんと胸を定めて死を急ぐ。戀しき人は先にあり此の世に残す心はなく。涙も零れね死用意。フシ無慚といふも愚かなり。地ヤア待て暫し大阪の叔父在所の親。恩深き伯母のあり狂亂したりと歎きをかけ。不孝の罪も恐ろしや。一筆づつの書置を残さばやと佛前の。經机引寄せて油も細き燈火の。消ゆる間近き我が命。心餘りて言足らぬ。オクリ筆のへすさみぞ哀れなるフシかゝる所に。地相住の道心石山より立歸り。調なんと助給御無事なか。今下向致したやあゑいと。地平包どうど卸して休みける。助給はつと思ひしが。調イヤ此の坊主はいろはのいの字も讀み書きならぬ幸ひと。まめで下向羨しい今にかい参りか。地在所の文を書きかけた釜にぬるも沸いてある。洗足して休息あれと言ひつつ筆を早めける。道心何の氣も付かず。構はずと遊ばせ。調扱石山の繁昌京大阪が打ちあける。ヤアそれにつき戻りが

け大阪へ立寄り。此方の里へ見舞うた在所にも何事なく。長兵衛殿もお息災伊達堀の伯母御から。地戀の言傳進上物を渡さうと。平包押開き來月の十七日は。お龜様の周忌盛物になされとて。調これ菓子か二袋お齋でもなされうばと。大阪の名物樋の上の切荒布。嵩高なばかりで錢安な物なれど。地これ齋にも非時にも重寶な。壹歩が二つ届けます。梅雨も近づく土用前咽喉の疵が起つたら。此の藥を參つて随分命延ばはつて。伯母様の後世菩提を頼むとある言傳。調これは又白縮緬の手巾帯。衣の上によからうと氣の付いた伯母御様。地必ず愚かになさるるな幸ひ文の序なり。皆々確かに届いたと懇に遊ばせ。愚僧も一宿仕り様々御馳走忝いと。ちよつと入筆頼みます言傳どもは明日。長道中の草臥我等は最早休みますと。我が事ばかり言ひしまひ。フシ奥に入りてぞ臥しにける。地此の間に助給は書置こまくと書き納め。伯母

は。未來で一所に付き添はんと胸を定めて死を急ぐ。戀しき人は先にあり此の世に残す心はなく。涙も零れね死用意。フシ無慚といふも愚かなり。地ヤア待て暫し大阪の叔父在所の親。恩深き伯母のあり狂亂したりと歎きをかけ。不孝の罪も恐ろしや。一筆づつの書置を残さばやと佛前の。經机引寄せて油も細き燈火の。消ゆる間近き我が命。心餘りて言足らぬ。オクリ筆のへすさみぞ哀れなるフシかゝる所に。地相住の道心石山より立歸り。調なんと助給御無事なか。今下向致したやあゑいと。地平包どうど卸して休みける。助給はつと思ひしが。調イヤ此の坊主はいろはのいの字も讀み書きならぬ幸ひと。まめで下向羨しい今にかい参りか。地在所の文を書きかけた釜にぬるも沸いてある。洗足して休息あれと言ひつつ筆を早めける。道心何の氣も付かず。構はずと遊ばせ。調扱石山の繁昌京大阪が打ちあける。ヤアそれにつき戻りが

にならずして誰人か。推量には及び申すま
じ其の節お龜諸共に相果て申す程ならば。
スエテ二度の歎きはかけまじき。とても助か
る程ならば。存らへ出家成就して御恩の伯
母様情の親。百年の御壽命過ぎ目出たく往
生遊ばさば。御菩提を弔ひ奉るこそ。フシ
順とも孝とも申すべけれ。地 去年はお龜が
憂を見せ。今年是我等が歎きをかけお心を
苦め申す事罪に罪を塗り長持孝行の元値に
外れ申すなり。さり乍ら師弟主従父子夫婦
五倫の親みいづれ愚かはなき中に妻となり
夫となり借老同穴の枕屏風。鴛鴦の襖障子
疵も破れもなき契。ハツミ今捨賣にはなり難
し。殊にお龜と我等こと従弟同士の水入ら
す。鼠入らすの竹戸棚フシ釘も離れぬ仲と
いひ。去年最期の折柄も。一所と思ふ頼に
て廿歳に足らぬ女の身。清く相果て候ひし
に。我等思はず存命しオクリ六道の。辻に只
一人今やくと。フシこそ待兼ね申すに
や。現に顯れ。夢に見え。幻に來り歎くさ

ま。見る度ごとくに片時も存らへてある心。
思ひやらせ下されとよ。今は此の世に亡き
妻を再び娑婆に掘出しする。小道具屋の身
にもあらず無常の。風の荒道具。身蓋挿は
ぬ離れ物。フシ愛き世の値打更になし。輪廻
の塵の。置き古し。地 無明の夜市に賣り。さ
けられんよりはと今宵亡妻の。忌日を期し
て去年お龜が死したる剃刀。縁と縁とを合
せ砥にかけ。廿二歳一睡の。夢をはらつ
て清月を己れが。眉間に施し。今月今日剃
刀の。コハリ双に滅し畢んぬ。悲しきかなや娑
婆に親をば冥途に妻。未來に情現世に慈
悲。中に愛き身を挾箱いつの。世にかは地
一對の。フシ一つ蓮に生るべき。これも因
果の。コハリ車長持轟く穢土は假の宿。有漏
路無漏路の中休み。割籠辨當。地 茶辨當。フ
シはけぬ。間の戯なれば。誰か端に残る
べき。たとへ此の度存らへても重ね簞笥の
抽出の。一重足らぬ如くにてお龜なければ
かひもなし去年一度に死したりと。思召し

切り給ひ歎きも悔みも御止め。只佛壇に差
向ひ夫婦の御回向あるに於ては。六尺屏
風の隔てもなく真直に受取り。先立つ妻の
跡繼と成り共に三途のかは葛籠。一荷に手
を取り打渡り西方淨土に一文字。越ゆるは
下品下用櫃忽ち上品勝棚にい。たら。んと
思へば最期急けども。返すくも伯母御様
御名残惜しき椀家具。法界行器の。御回向
偏に頼み奉る。南無阿彌陀佛彌陀佛と。フシ
涙を。そめて書き止む。切替阿彌陀佛毎日評判朝
暮の供養佛法繁昌の回向を得るも其の身の
果報と承る。